

『古今集』春の部、冒頭の構造（改稿）

平 沢 竜 介

『古今集』春の部、冒頭の構造は、既に拙著『王朝文学の始発』に収載したが、改めて見直して見ると、個々の歌の対応関係に十分な配慮がなされていないことに気が付いた。そこで、本稿では、個々の歌の対応関係を留意して、再度『古今集』春の部、冒頭の構造について論ずることにした。

本稿で対象とするのは、国歌大観番号1番から31番までの歌である。まず、最初の九首を挙げてみよう。

ふる年に春立ちける日よめる

在原元方

1年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ

春立ちける日よめる

紀貫之

2袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

題しらず

読んしらず

3春霞たてるやいづこみよしの吉野の山に雪はふりつつ

二条の後の春のはじめの御歌

4雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ

題しらず

読んしらず

5梅が枝に来るる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ

雪の木に降りかかれるをよめる

素性法師

6春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすの鳴く

題しらず

読んしらず

7心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

ある人のいはく、前太政大臣の歌なり

二条の後の春宮の御息所ときこえける時、正月三日お前に召

して、おほせごとあるあひだに、日は照りながら雪の頭に降

りかかりけるをよませ給ひける

文屋康秀

8春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

雪の降りけるをよめる

紀貫之

9霞たち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける

これらのうち1、2は、詞書とともに「春立ちける日よめる」とあり、歌詞にも「春は来にけり」あるいは「春立つけふ」という表現があることから、立春の日に詠じられた歌と明確に理解される。『古今集』春の部末尾が、本来は132「弥生のつごもりの日、花摘みより帰りける女どもを見てよめる」、133「弥生のつごもりの日、雨の降りけるに、藤の花を折りて人につかはしける」という詞書を持ち、「弥生つごもりの日」に

詠まれた歌二首で締めくくられていたと推定されること、また秋の部が169「秋立つ日よめる」、170「秋立つ日、うへのをのこども、賀茂の河原に川逍遙しける、ともにまかりてよめる」と「秋立つ日」に詠まれた歌とする詞書を有する歌二首で始められ、秋の部末尾も312「長月の晦日の日、大堰にてよめる」、313「おなじ晦日の日、よめる」と「長月のつごもりの日」に詠まれたとする詞書を有する二首によって閉じられていること、さらに夏の部の最後の歌が、168「六月のつごもりの日によめる」という詞書を有し、冬の部の最後の歌と思われる338が「ものへまかりにける人を待ちて、師走の晦日によめる」という詞書を有していることからすると、『古今集』の四季の部のうち、春と秋は冒頭二首が「立春」「立秋」の歌で始まり、末尾二首が「弥生つごもり」「長月つごもり」の歌二首で終わり、夏と冬は最後が「六月つごもり」「師走つごもり」の歌一首で終わるといふ構造を持っていると推定される。^(注2)とすると、1、2番歌は「立春」の歌群とするのが適切と思われる。

3番から9番までは、いずれも雪が詠み込まれている。雪といえは冬の景物であるが、まだ春の浅い時期に雪の降ることは珍しいことではない。これらは春のまだ浅いことを示すと同時に、冬との連続性を表すために置かれた「春の雪」の歌群とすることができよう。これらの歌の中には、4の「春は来にけり」、や6の「春たてば」のように立春の日の詠であることを思わせる歌詞も存するが、明らかに立春の日の歌とする徴証は見出せない。これらは、『古今集』が、先に述べたように、春と秋が冒頭二首と末尾二首を対応させ、夏と冬が末尾一首を対応させるという構造をとっていることからすると、やはり「春の雪」の歌群に収めるのが妥当と思われる。^(注3)

では、これら九首はどのような意図のもとに、どのような順序で配列

されているのであろうか。1は年内立春、すなわち一年が終わらないうちに、新しい年の始まりを告げる立春が到来した事態を詠じた歌である。この歌の「ひととせ」がどの期間を指すかについては諸説存するが、年内に立春が来ることによって、一年まるごと、あるいはその一部の期間において、去年とも今年とも呼びうる状態が出来るという矛盾した現象に注目して詠じられた歌であるという認識では、諸説一致する。^(注4)

古今集の撰者たちはこの元方の歌に、年が終わらないうちに新しい年がはじまるという奇妙な現象が詠じられている点に着目し、それが去年と今年の重層を詠じていることで、去年と今年の連続性を最も強く表現しているかと判断し、この歌を春の部の冒頭、つまり一年の一番初めに置くことにしたのであろう。

またこのように、春の初めに単に一年の始まりを意味するだけの歌でなく、一年の終わりとの連続性を持つ歌を配したということは、撰者たちが年月の運行を、年の始まりから終わりに向かって直線的に進むのではなく、年の終わりが再び年の始めに帰ってくるという循環的な姿として示そうとしたことを意味するであろう。

2の貫之の歌も立春の日に詠まれた歌とされる。しかし、この歌は1のように年内立春の歌とはされていない。この歌は新年になってからの立春に詠まれたものと見るのが妥当であろう。

一首は「袖ひちてむすびし水」が昨年の夏、「こほれる」が昨年の冬を表すというように、過ぎ去った年の出来事を回想しながらの立春の詠となっている。ここでも、去年の夏や冬に言及しながら、新たな年の始まりを詠じているところに、去年と今年の連続性が看取される。ただし、2に表現される去年と今年の連続性は、1の去年と今年の重層という表現によって示されるほどの強い連続性を表現してはいない。が、2は1

ほどではないにしても、一首の内容が去年との連続性を意識させるがゆえにここに配置されたのであろう。また、「春立つけふの風やとくらむ」という表現は、『礼記』月令の「孟春ノ月 東風水ヲ解ク」によりながら、想像上の景ではあるが、1に比べ、立春の日の風景が具体的に詠じられている点も注意される。

なお、1は春の部末尾「弥生つごもりの日」に詠まれた二首のうち、後の方の歌13と「年のうちに」という表現を共有して対応し、2は春の到来を告げる解氷を詠じ、春の終わりを告げる落花を詠ずる13と対をなすと考えられる。

1、2番歌では立春の日を詠むと同時に、前年の事象が詠み込まれ、前年とのつながりを意識した内容が詠まれていたのに対し、3番歌以降は前年の事象を詠ずることはない。しかし、3から9までは冬の景物である「雪」が詠み込まれており、冬の名残を感じさせる点、前年との連続を意識させる。

3番歌の詞書は「題しらず」となっているが、歌詞に「春霞たてるやいづこ」とあり、歌の読み手は霞が立っている場所を探している。このことは春になると霞は当然立つはず、それなのに霞の立つ景色も見えないといっているのであり、暗に今が春であることを示している。ただ、今が春だという認識はあっても、霞はどこにも見せず、吉野の山には冬を感じさせる雪が降り続いて、まだ春の到来は実感できないという早春の景が表現される。

続く4、5、6番歌には、いずれも雪とともに春を告げる鳥とされる鶯が詠み込まれる。3番歌が春の到来を詠みながらも、いまだ春の気配の見えぬ様を詠んでいたのに対し、4から6番歌は雪とともに鶯を詠み込むことによって、いまだ寒さが去りやらぬ中にも、春の訪れがほのか

に感じられる様が詠じられることになる。

4では鶯はまだ鳴いていないが、「鶯のこほれる涙今やとくらむ」という表現が、2番歌の解氷を詠じた表現と通ずるものとなっており、春の到来を感じさせる。^(注5) 5では鶯の鳴いている様が表現されることによつて、4より一層春めいてきたことが感じられるが、「いまだ雪は降りつつ」という表現が3番歌と共通し、冬の名残を感じさせる。^(注6) 6も鶯は鳴くが雪が降り積もっている点、5と同様冬の名残を感じさせるが、白雪を梅の花と見立てることにより春らしい雰囲気醸し出している。

このようにこの3から6はいずれも春の雪を詠ずるのであるが、3は立春となっても霞は見えず、吉野山には雪が降っていると、いまだ春らしい気配の見えぬ状態を表し、4は鶯は鳴かないが、水の溶ける様に春を表し、5は鳴く鶯を詠むことで春を感じさせつつも、一方ではいまだ降る雪を詠じ、6は5同様鳴く鶯と雪を詠じつつも、雪を花と見なすことで春が深まった気配をより強く感じさせるといふように、3から6は同じ春の雪を詠みながらも、春の気配の薄い歌からより強く春を感じさせる歌へという順に配列がなされていると考えられる。

7から9も、春の雪を詠んだ歌が続くが、これらには4から6まで共通して詠み込まれてきた鶯が詠み込まれていない。その代わり、これら三首はいずれも雪を他の物と見なす見立ての趣向が用いられている。7は、雪を花と見立てている。8はそれに対し、雪を白髪と見立てる技法を用いている。そして9では7と同様、また雪を花と見立てる技法が用いられる。つまりこの三首は、いずれも雪をあるものに見立てるといふ技法が用いられているのであるが、三首の真ん中の8が雪を白髪に見なしているのに対し、その両側の二首は雪を花に見なす技法が取られると、8を中心にした対称的な配列がなされていると考えられる。

そうした中で、7が三首の最初に配列されたのは、それが枝に積もった雪を花に見立てた歌であるという点で、6と共通性を有していたからであろう。それに対し、9は雪を花と見立てる点は同じであっても、6や7が雪を咲いている花に見立てているのに対し、9は雪を散る花に見立てている点に大きな相違がある。さらに、7は読人しらずであるのに対し、8は六歌仙の一人、文屋康秀の作であり、9は撰者貫之の作であるというように、7、8、9は古い時代の歌から新しい時代の歌という順で配列がなされている。このように7、8、9の配列の順序は、8を中心とした左右対称の構造、直前の歌群とのスムーズな接続、開花から落花への推移、歌の詠まれた時代といった点を意識して決められたものと思われる。

また、これらの歌は雪を詠んでいながらも、それが花に見立てられたり、「春の日の光にあたる我なれど」というように「春の光」が詠み込まれたりして、いずれも春を感じさせる歌となっている。同じ「春の雪」の歌群でも3から5では、雪はむしろ冬を感じさせるものとして詠み込まれていたが、この歌群においては6を承継ぐ形で冬の名残を感じさせつつも、春を予感させる雪が詠み込まれていることも注目される。と同時に、7から9が「春の雪」の歌群の最後に位置せしめられたのは、4から6が春の雪とともに鶯を詠み込んでおり、10から16までが「鶯」の歌群となっており、鶯を詠み込んだ歌群の間にわざと春の雪のみを詠じた歌群を挿入して、「春の雪」の歌群と「鶯」の歌群を明確に区別し、同時に後の「鶯」の歌群の構造を乱さないような配慮がなされた結果とも考えられる。

7番歌、9番歌には春のいつ頃詠まれた歌と確定できるような詞書や歌詞は見出せないが、8番歌は詞書から「正月三日」に詠まれた歌と判

明する。このことから、これら三首は「正月三日」前後の歌と見ることができよう。立春は正月三日よりも前に来ることあれば、後に来ることもあり、立春と正月三日の前後関係は年によって異なるのであるが、『古今集』春の部の配列において、正月三日の歌が「立春」の歌群の後に配置されているということは、撰者たちが年内立春の歌は除外するにしても、単に立春を詠じた2の歌において正月一日をも示そうとしていたことを意味するのではないだろうか。また、「立春」の歌群の次の「春の雪」の歌群の終わり近くにわざわざ正月三日の歌を配置したところからすると、3から7までの歌は正月一日から正月三日の間の歌として配列されたということになる。^(注8)

また、3から9までの「春の雪」の歌群全体を見渡してみると、3と9はそれぞれ春の雪の他に霞を詠み込んでいる点において対応し、4と8は二条の後関係の歌ということで対応する。5と7は前の二組ほど緊密な対応関係は見出しがたいが、題しらず、読人しらずという点では共通する。このように見ると、3から9までの「春の雪」の歌群は、6を中心にして左右対称の構造をなしていると考えられる。さらに、3と5は「雪はふりつつ」という表現を共有して、4を中心にして左右対称の構造をなし、7と9は既に述べたように、ともに雪を花に見立てて、8を中心にして左右対称の構造を形成している。また5と6はともに「木の枝」を詠じて対応する。

1から9までの作者を見てみると、1、2番歌の作者が撰者時代の歌人であったのに対し、3が読人しらず、4が「二条の後」で六歌仙時代の歌人、5が読人しらずで、6が撰者時代の歌人、7が読人しらず、8が六歌仙時代の歌人、9が撰者時代の歌人というように、撰者時代の歌人↓読人しらず時代の歌人↓六歌仙時代の歌人↓読人しらず時代の歌人↓

撰者時代の歌人↓読入しらず時代の歌人↓六歌仙時代の歌人↓撰者時代の歌人という順に、時代的には行きつ戻りつした配列となっている。

なお、これら七首の「春の雪」の歌群において、春の到来を告げるものとして詠み込まれている事象として、霞、解氷、鶯、花が挙げられる。このうち、解氷は初春のみの現象であり、この後12番歌に詠み込まれるのみであるが、霞、鶯、花は春の到来を告げるばかりでなく、春を代表する景物として、この後春の部の最後の部分に至るまで所々に詠み込まれる。

春のはじめによめる

藤原言直

10 春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな

春のはじめの歌

壬生忠岑

11 春来ぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ

寛平御時后の宮の歌合の歌

源当純

12 谷風にとくる水のひまごとに打ちいづる波や春の初花

紀友則

13 花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

大江千里

14 鶯の谷よりいづる声なくは春くることを誰か知らまし

在原棟梁

15 春立てど花もにはほはぬ山里は物憂かる音に鶯ぞ鳴く

題しらず
読入しらず

16 野辺ちかく家居しせば鶯の鳴くなる声はあさなあさな聞く

これら七首には、12を除いていずれも鶯が詠み込まれており、「鶯」の歌群と呼ぶことができよう。12は谷風に解ける水が詠まれた歌で、詞書、歌詞のどこを見ても鶯を詠んだ歌とは認められないが、これは後に述べるように鶯の歌群の配列に時の推移を反映させようと、撰者たちが意図

的に行ったものと考えられ、配列の乱れとは考えられない。

ところで、『古今集』春の部は「立春」の歌群から始まったが、その「立春」の歌群に続いて配列されるのは、「春の雪」の歌群、そしてこの「鶯」の歌群ということになる。このように「立春」の歌群の直後に、冬の名残を感じさせる「春の雪」の歌群を配し、その後春の気配を感じさせる「鶯」の歌群が配置されるという構成は、旧年からの連続した相を示しつつも、新しい年が始まり、春が次第に深まってゆくという自然の推移の具体相を配列の上で示そうとした撰者の意図の現れと見てよからう。

この七首のうち最初の二首、10、11には「春のはじめ」の歌という詞書があり、「鶯だにも鳴かずもあるかな」「鶯の鳴かぬかぎりは」と鶯の鳴く以前の状態が表現されている。当時、鶯は谷間で春を待ち、暖かくなると谷から飛び出して鳴くとされていたから、これら二首にえがかれている鶯は早春の谷間に潜む鶯ということになる。^(注9)

10番の歌がこの歌群の最初に配されたのは、「春やとき花やおそき」と鶯とともに花が詠み込まれており、その前の「春の雪」の歌群の最後の歌が、雪を花に見立てた歌で終わっているのと連続性を有したからと考えられる。

続く11番は、10番が春が早く来過ぎたのか、それとも花の咲くのが遅すぎるのか、鶯によって判断しようといっているのに対し、人が春が来たと言っても鶯が鳴かない間は春とは思わないと、春の到来の基準を鶯の鳴き声に求めるという類似した内容を詠じており、かつ11においては、鶯の鳴き声によって春は到来するとする主張が、10よりもより強い形で表現されていることから、ここに配されたのであろう。

12番歌は、先にも述べた通り、詞書にも、一首の表現の中にも、鶯を

詠じた歌とする徴証を見出すことはできない。ここには「谷風」によって解ける氷が詠じられ、その解けた氷の隙間から流れ出る波を春の初花と見なすという趣向が凝らされているのみである。氷が解ける様を春の到来を告げるものとして詠ずることは、2番歌、4番歌にも見られたが、ここでもそうした景が繰り返して表現される。しかし、12番歌が表現する春の到来の気分は、この一首のみで完結するものではない。そこに詠み込まれた、谷間の春の到来、および「谷風」「初花」の語は続く13、14番歌と密接な関連を有し、この「鶯」の歌群を時間的により整然と組織するために機能していると考えられる。

すなわち、13の「花の香を風のたよりにたぐへてぞ」という表現は12の「谷風」「初花」の語との関連が認められるし、14の「鶯の谷よりの声なくは」には、12の「谷風」の語が響いていると思われる。また、12で谷間の春の風景が詠じられることによって、13、14では谷間にもようやく春が訪れ、谷にこもっていた鶯がいよいよ谷から飛び出そうする気配が想像される。13はそうした気配を受けて、花の香りを風に添えて、鶯が谷から出るのを促そうとするのであり、14は反実仮想の構文が12の歌の雰囲気とあいまって、谷から出ようとする鶯の姿を彷彿とさせる。

このように見てくると、鶯を詠じていないが故に「鶯」の歌群の中で異質と思われた12番歌は、実は谷間の氷が風に解ける様を表すことによって、谷間の春の到来を示し、続く二首に、谷から出る直前の鶯を詠じているとの印象を付与するという重要な働きを担っていることが理解される。^(注10)
「鶯」の歌群、六首目15と七首目16は鳴く鶯を詠じている。六首目はそれ以前の三首が「寛平御時后の宮の歌合の歌」で、作者が撰者時代の歌人だったのを承けて、同じ歌合の歌で撰者時代の歌人の歌を配したのである。歌の内容も花がまだ咲いておらず、谷から出たばかりの山里

に鳴いている鶯が詠じられている。それに対し、七首目16は題しらず、読人しらずの歌で、「野辺ちかく家居しせば」と平地に鳴く鶯を詠んでいることから、15の後の配列されることになったのである。

また、「鶯」の歌群の一首目10は鶯が鳴かないことを詠じて、歌群の最後の歌16が鶯がしきりに鳴くことを詠じているのと対をなし、「鶯」の歌群二首目11は春が来ても鶯が鳴かないことを詠じて、終わりから二首目15が春が来て鶯が鳴く様を詠じているのと対をなす。歌群の三首目12は終わりから三首目14と「谷」の語を共有して対応するというように、10から16までの「鶯」の歌群は、13を中心に左右対称の構造を作っている。さらに、10、12、13、15はいずれも「花」の語を詠み込んで対応すると同時に、先の「春の雪」の歌群の後半に存する6、7、9とも「花」を詠み込んで対応する。

また、「春の雪」の歌群の二首目4は「鶯のこほれる涙今やとくらむ」と氷が解ける様を詠じ、12が「谷風にとくる氷のひまことに」と解氷を詠じると対応し、5が「梅が枝に来る鶯春かけて鳴けども」と、鶯が鳴いて春の来たことを告げていると詠ずるのに対し、11が春が来たと言いつても鶯が鳴かない限り春が来たとは思わない、つまり鶯の鳴き声こそ春の到来を告げるものだ詠じて、ともに春の到来を鶯の鳴き声によって知るという点で共通した認識を示して対応する。6は立春が過ぎたので雪を花と見間違えて鶯が鳴くと詠ずるのに対し、10は春の来るのが早いのか、花の咲くのが遅いのか、それを判断する鶯が鳴かないと詠じ、いずれも春になったのに花の咲かない時期の鶯について詠じて対をなし、7と9は、先にも述べたとおり、二首とも雪を花に見立てて対応する。すなわち、「春の雪」の二首目4から「鶯」の歌群の三首目12までの歌群は、8を中心に左右対称の構造を形成しているのである。

10から16までの「鶯」の歌群は、その前の「春の雪」の歌群を承ける形で、最初の二首は撰者時代の歌人の歌で始められ、続く四首すなわち12から15までは、「寛平御時后の宮の歌合の歌」で撰者時代の歌人の歌が並べられ、最後16に「題しらず」「読人しらず」の歌が配置されるという形となっている。

「鶯」の歌群の後は、次のような配列がなされる。

(題しらず)

(読人しらず)

17春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

18春日野の飛火の野守いでて見よいまいく日ありて若菜摘みてむ

19み山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり

20梓弓おしてはるさめ今日降りぬ明日さへ降らば若菜摘みてむ

仁和の帝、親王におはしましける時に、人に若菜たまひける

御歌

21君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ

「歌たてまつれ」とおほせられし時、よみてたてまつれる

つらゆき

22春日野に若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ

これら六首のうち、最初の一首17以外はいずれも「若菜摘みてむ」「若菜摘みけり」「若菜摘みてむ」「若菜摘む」「若菜摘みにや」というように「若菜摘み」が詠み込まれているが、17には「若菜」は詠まれていない。松田武夫は「春さき野を焼くことは、若草の繁茂を意味し、若菜の前提となる」として17を「若菜」の主題のもとに統括するが、「若菜」が詠み込まれていないことからすると、やはり17は「若菜摘み」の前段階として一首だけはあるが「野焼き」の歌が立てられた見るのがよいように思われる。「鶯」の歌群の最後の歌は「野辺ちかく家居しせば」と野

辺を詠じていたが、この表現は続く「野焼き」の歌への移行をなめらかなものになっている。

続く18から22までの歌群は、先に述べたように全て「若菜摘み」が詠み込まれており、「若菜」の歌群とすることができよう。若菜摘みは正月初子の日、または正月七日に行われるものであるが、それらの日は必ずしも立春の日の後になるとはかぎらない。この「若菜」の歌群が「立春」の歌群の後に配置されるのは、「春の雪」の歌群のところでも述べたように、『古今集』においては、「立春」の歌群が正月一日をも含んでいるとの認識があったことによると見てよいのではなからうか。

また、この「野焼き」、「若菜」の歌群は、17の「野焼き」の歌が題しらず、読人しらずの歌、「若菜」の歌群の18から20までが、題しらず、読人しらずの歌、21が光孝天皇の歌であるから六歌仙時代の歌、22が撰者時代の歌という配列になっている。「鶯」の歌群の最後の歌が題しらず、読人しらずの歌で終わっていたのを承けて、「野焼き」の歌は、題しらず、読人しらず、「若菜」の歌群も「野焼き」の歌を承けて、題しらず、読人しらずで始まり、六歌仙時代の歌、撰者時代の歌というように、詠まれた時代の古い歌から新しい歌へと順次配列がなされていることになる。

18からの「若菜」の歌群は、18が「いまいく日ありて若菜摘みてむ」と、若菜を摘むまであと何日かあるという状況が詠まれていることから「若菜」の歌群の最初に置かれたのであろう。「野焼き」の歌17で詠まれた「春日野」が、この歌にも詠み込まれていることも注目される。

19以降は、若菜摘みが可能になった時期における詠が並べられていると考えられる。このうち19、20は、19が山にはまだ雪が消えていないのに、都では若菜を摘んでいることよと、自らは山に住んでいて若菜摘みをしていないが、都に来てみると若菜摘みが始まっていると詠じ、20は

「若菜を摘む時がやっと来たのに、今日は春雨が降って摘めない。明日もまた降ったら、濡れるのをいとわず摘んでしまおう」と若菜が摘める

状態になったにもかかわらず雨のため若菜を摘むことのできない人物の心情を詠ずるというように、ともに若菜を摘める時期になっても若菜を摘めないでいる人物の状態がえがかれている。19が20の前に配列されているのは、19がまだ雪の消えていない山中を詠じて、冬の気配を強く感じさせるのに、20は里の雨を詠じて春の深まりを感じさせるからであろう。

それに対し21、22では、若菜摘みを実際に行われている様が表現される。22が21の後に配されるのは、21が冬の名残を感じさせる雪が降っているにもかかわらず若菜を摘む様を詠ずるのに対し、22が雪や雨にも妨げられず、春らしい光景の中、若菜摘みに出かける人々を詠じているというように、22の方が時期的に遅い詠と見なされる点にあるのであろう。

なお、貞応本系統の本文においては、18と19の歌の順序が逆になっているが、主要伝本の多くは右に示したように18、19の順となっており、かつこの歌順の方が若菜を摘む以前の段階から若菜を摘む段階へと時間を追った配列となる点を考慮すると、18、19の歌順が『古今集』が撰進された時の本来の形を示していると想定される。

また、「若菜」の歌群冒頭の18と歌群末尾の22はともに「春日野」を詠じて対応し、二首目19と四首目21はいずれも「雪」を詠み込んで対応する。とすると、18から22の「若菜」の歌群五首は20を中心とした左右対称の構造を取っていることになる。と同時に、「野焼き」の歌17と「若菜」の歌群の冒頭18はともに「春日野」を詠み込んで、「若菜」の歌群末尾の22が「春日野」を詠み込んでいるのと対応し、「鶯」の歌群末尾の16と「若菜」の歌群二首目の19が「野辺」の語を詠み込んで対応することも注目される。

「若菜」の歌群に続く一首は次のような歌である。

題しらず 在原行平朝臣

23春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ

この歌は霞を詠んだ歌であり、直前の「若菜」の歌群に分類することはできないし、またこの歌に続く歌とも詠まれた題材において直接の関連性を持たない。故に、この歌は一首だけであるが、「霞」の歌として立項することにする。霞はこれ以前にも、3番歌、9番歌に詠み込まれ、かつこの後も春の終わりまで多くの歌に詠み込まれるというように、春の到来を告げるとともに、春という季節そのものを表す重要な題材であるが、それが歌群の主題となるのはこの場所以外には存在しない。

この歌は「霞の衣」を詠じている点で、前の「若菜」の歌群の最後の二首が、「わが衣手に雪は降りつつ」「白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ」とそれぞれ袖を詠んでいたのに対応し、「霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ」という表現が、霞の背後にある山の緑を連想させ、それが以後の「春の緑」を詠じた歌群に連続する。作者行平は六歌仙時代の歌人で「若菜」の歌群が撰者貫之の歌で終わっていたから、一時代前の時代の歌人へと移行したことになる。

なお、23は「山風にこそ乱るべらなれ」と「山」と「風」を詠じているが、これは15の「山里」、19の「み山」という表現と対応するとともに、2が「春立つけふの風やとくらむ」、13が「花の香を風のたよりにたぐへてぞ」と「風」を詠み込んでいるのと対応する。

寛平御時後の宮の歌合の歌 源宗于朝臣

24ときはなる松のみどりも春くればいまひとしほの色まさりけり

「歌たてまつれ」とおほせられし時、よみてたてまつれる

つらゆき

25わがせこが衣はるさめ降るごと^(注5)に野辺のみどりぞ色まさりける
この二首は、24が「松のみどりも春くればいまひとしほの色まさりけり」、25が「野辺のみどりぞ色まさりける」というように、ともに春の緑が一層濃くなったと表現しており、「春の緑」を詠じた歌群と見ることができよう。24は一見松の緑を詠じた歌と解されるが、「松のみどりも」と他の草木も緑に染まったことを暗示しており、春の緑を詠じた歌と見てよからう。

作者は二首ともに撰者時代の歌人であるが、24が「寛平御時後の宮の歌合の歌」であるのに対し、25にはそのような詞書はなく、前の「霞」の歌群の作者行平が六歌仙時代の歌人であったのを受けて、「寛平御時後の宮の歌合の歌」、撰者貫之の歌というように、時代の古い方から順に歌を配したと考えられる。

また、25には春雨が詠じられているが、春雨が始めて詠じられるのは、この歌群の二つ前の「若菜」歌群の20番においてであり、それ以前には雪が詠まれることはあっても雨が詠まれることはなかった。それに対し、雪は春の部冒頭から、まだ冬の名残を感じさせるものとして、3、4、5、6、7、8、9、19、21に詠み込まれていた。それが「若菜」の歌群においては、

19み山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり
20梓弓おしてはるさめ今日降りぬ明日さへ降らば若菜摘みてむ

仁和の帝、親王におはしましける時に、人に若菜たまひける
御歌

21君がため春の野にいでて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ
というように、19でみ山に消え残る雪が詠まれ、20で始めて春雨が詠まれ、21で再び里に降る雪が詠まれるというように、雪と春雨が交互に詠

まれ、その後この「春の緑」の歌群で25に春雨が詠まれるということになり、さらにこの25以降は、春雨が詠まれることはあっても雪が詠まれるということとはなくなる。このような配列は、冬の名残を感じさせる雪が次第に収まり、それと前後するかのよう^(注6)に春雨が降り始めるという季節の推移を見事に表現しているといえよう。

なお、「春の緑」としては既に「若菜」の歌群が登場しており、「春の緑」の歌群が「若菜」の歌群の後に登場するのは、順序が逆のように思われるが、「若菜」は春の到来を告げる景物ということで「春の緑」の歌群の前に配置されたのであろう。

24は「松」を詠み込んで、同じく「松」を詠じている19と対応し、25は「野辺」を詠み込むことで、「鶯」の歌群の末尾16、「若菜」の歌群二首目19と対応するとともに、20と「はるさめ」の語を共有し対応する。
(歌たてまつれ)とおほせられし時、よみてたてまつれる)
(つらゆき)

26青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける

西大寺のほとりの柳をよめる 僧正遍照

27あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

この二首は柳を詠じたもので、かつ「青柳」「あさみどり」というように、若々しい青い芽を出した春の柳が詠み込まれており、前の「春の緑」の歌群を承ける形で「青柳」の歌群が形成されていると考えられる。
26は作者が「春の緑」の歌群の最後の歌の作者と同じ貫之で、詠まれた状況も全く同一であることから、この歌群の最初に配置されたのである。その結果27は、当然歌群の二番目に配されることになる。作者は貫之より一時代前の六歌仙時代の歌人遍照であるから、撰者時代の歌から六歌仙時代の歌というように、再び古い時代に遡る形で歌が配される

ことになる。

また、26では「乱れて花のほころびにける」という表現がなされている。これ以前の歌において花という語が詠み込まれた歌は、6、7、9、10、12、13、15とあるが、それらの表現をもう一度見てみると、

6 春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすの鳴く

7 心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

9 霞たち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける

12 谷風にとくる水のみまごとに打ちいづる波や春の初花

というように、6、7、9は雪を花と見立てた歌、12は波を花に見立てた歌で、いずれも実際に花の咲いている様を詠じたものではない。また、10、15は、

10 春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな

15 春立てど花もにははぬ山里は物憂かる音に鶯ぞ鳴く

というように、まだ花の咲いていない状態が詠じられている。ただ、13だけは、

13 花の香を風のとよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

と、花の香で鶯を誘い出そうというのであるから、花の咲いている状態が詠まれている。

このように、ここまで「花」の語を詠じた歌を見渡してみると、6、7、9、12という、春の初めの部分においては、花以外のものを花に見立てる歌が配され、春の予感や春を待望する気持を表現し、ついでそれらと交互するように10、15の花の咲かない状態を詠じた歌が配されて、いまだ春浅き様が表現され、その10、15と交差させて13、26でようやく花の咲く状態を詠ずる歌が配置されて、春の本格的な到来が告げられるというように、異なった状態を重ね合わせつつ、次第に春らしい状態へ

の変化が表現されるという配列がなされている。このような配列のあり方は、先に見た雪と春雨の配列法と同様の配列法であり、季節が行きつ戻りつしながら、次第に深まって行く様を表現しようとする撰者の意図に沿ったものであると考えられる。

なお、21は「衣手」、22は「袖」と、いずれも「袖」を詠むのに対し、23と25はともに「衣」、26と27はともに「糸」を詠ずるというように、21から27までの歌群は24を中心に23と25が「衣」を詠み込んで対応し、21、22の「袖」を詠じた二首一組の歌群と26、27の「糸」を詠み込んだ二首一組の歌群が対応するという左右対称の構造を形成する。かつ、21と27は詞書が付されており、作者もともに六歌仙時代で共通するのに対し、22と26はいずれも「歌たてまつれ」とおほせられし時、よみてたてまつれる」という詞書を有し、作者も貫之で一致する。とすると、21から27までの歌群は、24を中心に23と25、22と26、21と27が対応する左右対称の構造を形成していることと見ることができよう。

また、24は「松のみどり」、25は「野辺のみどり」、27は「あさみどり」といずれも「みどり」を詠じて対応する。

題しらず

読入しらず

28 百千鳥さへづる春は物ごとにあたらまれども我ぞふりゆく
17から27まで、「霞」の歌一首を挟んで「若菜」「春の緑」「青柳」と植物に関する歌が配列されてきたが、この28では一転して「百千鳥」が詠まれ、ここから春の鳥を詠じた歌群が始まる。春の鳥としては既に「鶯」が登場しており、「百千鳥」すなわち、春の様々な鳥がこの位置に登場するのは、順序が逆のように思われるが、「鶯」は春を告げる特別な鳥ということと、「百千鳥」の歌より前に置かれたのであろう。それはちょうど「若菜」の歌群が「春の緑」の歌群の前に置かれているのと同様な

理由によるものであろう。28の歌の作者は読人しらずであるが、これは直前の「青柳」の歌群の作者が、撰者貫之、六歌仙遍照というように、時代を遡って歌が配列されていたのを承ける形となっている。「百千鳥」の歌の後は「呼子鳥」の歌が続く。

（題しらず）

（読人しらず）

29をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな
28で「百千鳥」と、春の様々な鳥が一括りにうたわれたのを承けて、これ以後個別の春の鳥がとり上げられることになる。春の個別な鳥として最初に挙げられるのは、呼子鳥である。呼子鳥の歌は一首のみであり、これを「呼子鳥」の歌とする。この歌の詞書、作者名表記は、題しらず、読人しらずで、直前の28と同様である。

雁の声をききて、越へまかりけるひとを思ひて

凡河内躬恒

30 春くれば雁帰るなり白雲の道ゆきぶりに言やつてまし

帰る雁をよめる

伊勢

31 春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる

呼子鳥の次に挙げられるのは、春の雁、すなわち帰雁である。春になると様々な鳥が鳴き始める中、北に帰ってゆく雁、春の鳥の中で特殊な習性を持つ雁を、撰者達は「帰雁」の歌群として、春の鳥を詠じる歌群の最後に位置せしめたのであろう。^{（在徳）}

30、31はともに撰者時代の歌人の歌であり、直前の「呼子鳥」の歌の作者が読人しらずであったのから撰者時代の歌人の歌へと、時代的には新しい歌が配されることになる。

30、31の配列は31が「花なき里に住みやならへる」と花を詠じており、それが続く「梅」の歌群の以降の花を詠じた歌群とスムーズに連続する

ことから、二首の歌の後に置かれ、必然的に30が「帰雁」の歌群の最初に配置されることになったのであろう。春の花を詠じた31の歌については、先にも触れたが、26の花の咲く状態を詠じた歌を承けて、「花なき里に住みやならへる」という表現がいかに花の咲く季節になったことを思わせて、それ以降に続く「梅」「桜」「花」「藤」「山吹」という春の花の大歌群を導き出すのにふさわしい表現となっている。

また、28が春になって鳥が集って来るのを詠ずるのに対し、31は春を見捨てて北に帰って行く雁を詠じて対応し、29は鳥が呼ぶ、30は鳥に言伝を託すというように、ともに鳥に言葉を関与させている点で共通する。28から31の歌群は、29と30の対を中心に左右対称の構造となっている。と同時に、28は8番歌

と同時、28は8番歌

二条の後の春宮の御息所ときこえける時、正月三日お前に召して、おほせごとあるあひだに、日は照りながら雪の頭に降りかかりけるをよませ給ひける 文屋康秀

8 春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

という歌と、ともに生命が輝き始める春であるにもかかわらず自らが老いていくことを詠じて対応し、31は9番歌

雪の降りけるをよめる 紀貫之

9 霞たち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける
という歌と、ともに「霞」「花なき里」という表現を用いて対応する。

さらに、28と31の間にある29は、

（寛平御時後の宮の歌合の歌） 在原棟梁

15 春立てど花もにははぬ山里は物憂かる音に鶯ぞ鳴く

題しらず 読人しらず

16 野辺ちかく家居しせれば鶯の鳴くなる声はあさなあさな聞く

と、15が「物憂かる音に鶯ぞ鳴く」と詠じ「おぼつかなくも呼子鳥かな」という表現と対応し、16が明るい野辺にしきりに鳴く鶯を詠じて、どこなのか見当もつかない山の中で頼りなさそうに鳴く呼子鳥と対をなす。

30は

(寛平御時後の宮の歌合の歌)

紀友則

13 花の香を風のとよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

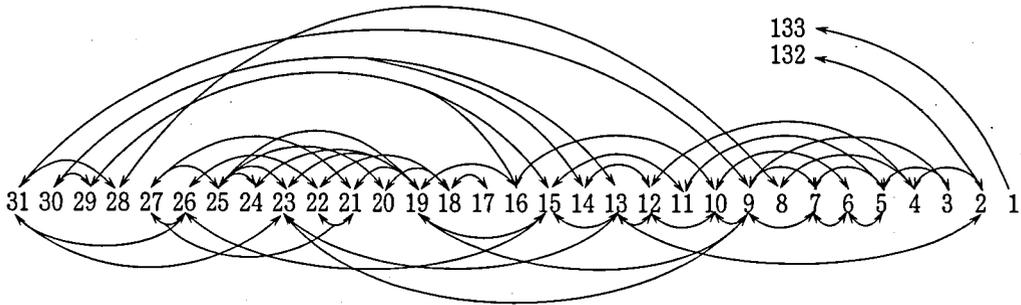
14 鶯の谷よりいづる声なくは春くることを誰か知らまし

と、13が花の香をたぐえた風のとよりを送って、鶯を呼び出そうと詠ずるのに対し、北に帰る雁に手紙を託そうと詠じて対をなし、14が鶯が谷から飛び立つと春が来ると詠ずるのに対し、春が来ると雁が北へ帰って行くと詠じて対をなす。

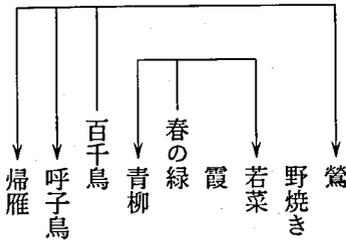
すなわち、28から31の「百千鳥」、「呼子鳥」、「帰雁」の「鳥」を詠じた歌ないし歌群は、28が8、31が9というように、歌群の最初が「春の雪」の歌群の末尾から二首目、歌群の最後が「春の雪」の歌群の末尾の歌と対応し、それによって「鳥」を詠ずる一つのまとまりを持った歌群であることが示されると同時に、「鶯」を詠み込んだ歌群の冒頭の位置を確定し、28と31の内側に在る29が「鶯」の歌群の最後の歌15、16、30が同じ「鶯」の歌群の13、14と対応して、「百千鳥」、「呼子鳥」、「帰雁」の歌ないし歌群以前に存在する「鶯」の歌群の末尾の位置を確定することは注目に値しよう。

また、31が「霞」を詠じ、3、9、23と対応するとともに、「花」を読み込んで、6、7、9、10、12、13、15、26と対応し、特に「花なき里に住みやならへる」という表現が、9番歌の「花なき里も花ぞ散りける」と類似していることも注意されよう。

以上述べてきたことを図示すると、下図のようになる。



立春	春の雪	鶯	野焼き	若菜	霞	春の緑	青柳	百千鳥	呼子鳥	帰雁
----	-----	---	-----	----	---	-----	----	-----	-----	----



なお、春の部、冒頭の歌群の配列は、見てきたように「立春」、「春の雪」、「鶯」、「野焼き」、「若菜」、「霞」、「春の緑」、「青柳」、「百千鳥」、「呼子鳥」、「帰雁」という順になされていたが、このうち「鶯」から「帰雁」の歌群までは、「霞」の歌群を中心に「霞」の直前の「若菜」と「霞」の直後の「春の緑」「青柳」が植物を詠じている点で対応し、「若菜」の歌群の二つ前の「鶯」と「青柳」の歌群に続く「百千鳥」、「呼子鳥」、「帰雁」の三つの歌群は鳥を詠じて対応するというように、「霞」の歌群を中心にその外側に植物を詠んだ歌群、さらにその外側に鳥を呼んだ歌群を配置するという対称的な配列がなされている。

しかも、それら植物を詠じた歌群は、「春の緑」の歌群が「若菜」、「青柳」を詠じた歌群の上位概念を表す歌群として、それら植物を詠じた歌群の中心に位置し、鳥を詠じた歌群は、「百千鳥」の歌群が「鶯」、「呼子鳥」、「帰雁」を詠じた歌群の上位概念として、鳥を詠じた歌群の中心に位置するという構成がとられていることも注目される。

- 注
- (1) 拙著『王朝文学の始発』（笠間書院、平成21年）
 - (2) 新井栄蔵「古今和歌集四季の部の構造についての一考察―対立的機構論の立場から―」（『国語国文』41巻8号、昭和47年8月）
 - (3) 松田武夫は「古今集の構造に関する研究」（『風間書房、昭和40年9月』）で、1番歌から6番歌までを「立春」の歌群と認定する。その根拠は4番歌が「春は来にけり」、6番歌が「春たては」という歌詞を持っていることにある。6番歌まで立春を思わせる表現があることから、そこまでの歌を立春の歌群とするのである。
 - (4) 竹岡正夫「古今和歌集全評釈」（『石文書院、昭和51年10月』）
 - (5) 4番歌の「雪のうちに春は来にけり」は1番歌の「年のうちに春は来にけり」という表現とも対応している。なお、この歌の詞書は「二条の後の春のはじめの御歌」となっている。渡辺秀夫は、『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、平成3年1月）第一篇、第二章において、平安時代の和歌において、谷に住む鶯は「まだ世に出ず辛苦する、世に受け入れられない不遇の身の上」を意味するものとして詠まれたことを指摘する。とすると、この4番歌の詞書は身の不遇を詠ずるといふ解釈を排除するために付されたのかもしれない。
 - (6) 5番歌の「春かけて」の解釈は、「春を待ちかねて」、「冬から春にかけて」「春になって」など様々な解釈がなされているが、工藤博子「古今集五番歌の「春かけて」の解釈―万葉集と三代集の用法に及ぶ―」（『香椎鴻』38号、平成3年5月）、岩佐美代子「春かけて」考―中世同種表現詠の解釈に及ぶ―」（『和歌文学研究』84号、平成14年6月）の論考より、「春だと言って」の意とするのが妥当であろう。
 - (7) 松田武夫は「古今集の構造に関する研究」で、この三首を「雪」の歌群とする。
 - (8) 松田武夫は「古今集の構造に関する研究」164頁で、「康秀の歌の詞書の中に、「正月三日」とあって、この歌が一月三日の歌であることを明らかにしている。春歌上の冒頭部分の歌の排列が、時間的基準によつたものと考へられるので、この歌の前までの歌は、一月三日以前の歌と見なすことができ、第六首までを、立春の主題下に包括することの一つの根拠にもされるのであ

る」と指摘する。

- (9) 10、「春のはじめによめる」「春のはじめの歌」という詞書は、4番歌の「二条の後の春のはじめの御歌」という詞書と紛らわしいが、これは撰者時代の歌人の歌には何らかの詞書を付けないければならないという事情によるものであろう。と同時に、これによってこの二首がまだ谷に潜む鶯を詠じたものであることを強調しようとしたのであろう。あるいは、4番歌同様、身の不遇を詠ずるといふ解釈を排除するという意図もあつたかもしれない。

- (10) 12, 13は、「寛平御時后宮歌合」においては、春歌二十番の巻頭に、

左 紀友則

1花の香を風のたよりに比へてぞ鶯さそふしるべにはやる

右 源当純

2谷風のとくる水のひまごとにうち出づる波や春の初花

という順で載っている。

- (11) 『古今集の構造に関する研究』172頁。

- (12) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社、平成10年2月）は、この歌を「春雨が、空から地上一帯に降りだした。明日も降るなら、若菜を摘むことができよう」（竹岡全評釈）のように訳すのが一般的だが、配列から見て疑問だと言わざるを得ない」として、歌の要旨を引用文のように解する。

- (13) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』175頁で、23番歌は「前の「若菜」の主題の最後の貫之の歌の「しろたへの袖ふりはへて」と、更にその前の仁和のみかどの歌の「わが衣手」とに関連する」という。また、片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、21から26までは、21「わが衣手」22「しろたへの袖ふりはへて」23「霞の衣」ぬきをうすみ」「乱るべらなれ」24「いまひとしほ」25「せこが衣はる」26の「糸よりかくる」「乱れて」「ほころびにける」というように、衣に縁のある語で続いていると指摘する。

- (14) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』で、これを「緑」の歌群とする。

- (15) 『新編日本古典文学全集』は、「松のみどりも」といって、他の木々には当然、春色が訪れたことを暗示している」とする。

- (16) この23から25の配列には、「山風から山の風景」↓「山の風景から山の松」↓「山の松から野辺の緑」といった連想が働いていたかもしれない。とする

と、24は19の「み山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり」を承け、山の松の雪もようやく消えたことを示しているとも考えられる。

- (17) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』で、これを「柳」の歌群とする。
- (18) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』179頁で、「さきに、鶯を春の鳥の一番手として揚げ、ここにまた、百千鳥・呼子鳥・帰雁を一箇所にまとめて挙げてゐるが、鶯は、早春の花形として人々に思慕され、その初音によって、はじめて春の開幕を知るといった明朗さである。それに引きかへ、帰雁を中心とした百千鳥・呼子鳥の歌は、春の憂愁を表はし、彼此対照して、春の心を表現してゐるやうに解される」という。